
図書室の初恋 ～眼鏡ちゃんと王子様 First Love ver.～

遙葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

図書室の初恋 眼鏡ちゃんと王子様 First Love
ver. 1

【Nコード】

N5925T

【作者名】

遙葉

【あらすじ】

普通科と芸能科が併設している高校に通っているあずは、おさげに眼鏡という絵に描いたような真面目少女。アイドルにも興味もなく、だからって恋に興味があるわけでもない。ただ毎日を流れるように過ごしていた。

そんなある日、図書室で眠っている男子生徒と遭遇。予鈴にさえ気がつかず眠っている彼を親切心で起こしてあげたあず。後日、その彼が芸能科に通う成瀬 鵠斗なるせ こはるとだと知り……

『眼鏡ちゃんと王子様』の番外編です。
あずと鵠斗が、恋人になるまでのお話になります。
本編知らなくてもノープログラム！

第1話 朝の図書室（前書き）

『眼鏡ちゃんと王子様』の番外編になります。
あずと鴫斗が、恋人になるまでのお話になります。

第1話 朝の図書室

私立 楯丘学園校には普通科と芸能科という少し特殊なコースが併設されていた。おかげで楯丘学園の名物となっている朝の通学は、普通科の生徒にとっても大変なものだった。

芸能科に通っているアイドルの私生活を一目見たいというファン心理からか、校門の前は人だかりが出来ていてうっかりアイドルと登校時間が重なってしまうと、ファンの人たちにもみくちゃにされるという悲劇に合う。

私は、アイドルと遭遇しないために朝早く学校へ登校する。というルールを決め、誰よりも早く学校へと登校していた。学校に一番につくと、教室の窓を開けて空気を入れ替える。その後、予鈴がなるまでの間、私は図書室で時間を過ごす。

うちの学校は、図書室が割とオープンに開いている。先生がいないと借りる事は出来ないが、基本いつでもだれでも自由に利用できるようにと、朝早くから開いているが、あまり図書室を利用する生徒はいない。

だから朝、図書室で私以外の生徒に合ったことは、今まで一度もなかった。

入学してから今日までは――

「……………」

誰もいないと思っていた図書室で、一人の男子生徒が眠っていた。窓から差し込む朝日が、窓側の席に座って机を枕代わりにして眠っている男の子のブラウンの髪を照らしていた。

開かれている教科書を見て、同級生だと確信した。

でもまあ、起こすこともないか――と思い、私は再び本棚へと戻った。

時間が経つにつれて外が騒がしくなり始める。通学時間になり、芸能科の生徒たちも通学し始めたらしく、時々黄色い声がこの静かな図書室にも聞こえてくる。

それでもまだ彼は起きようとはしなかった。

ちらりと腕時計で時間を確認すると、予鈴5分前だった。

眠っている彼の前で、起こそうかどうか……と悩んでいると、予鈴が鳴ってしまった。

「あの——……予鈴、なりましたよ？」

私は勇気を振り絞り、彼に声をかけるもピクリとも動かない。いくら静かな図書室だと言っても、ここまで熟睡出来るなんてある意味凄いことだと思う。

今度は、ためらいながらも肩をポンポンと軽く叩いてみた。

「予鈴なっちゃいましたけど、起きなくて大丈夫ですか？」

「ん……ん——……ん？あんた誰？」

ゆっくりと顔をあげると目をこすり腕を上に向けて伸びをした後、横にいる私に気がついたのか彼は言った。

日本人離れしたような整った顔立ちの彼が、じっと私を見る。

それだけでドキドキしてしまい、私は慌てながら言う。

「朝、図書室に来たら……寝てみたいだから……それで……あの……予鈴鳴っちゃったんだけど、大丈夫ですか？」

前半、何を言ってるのか自分でもわからないけど、『図書室に来たら、あなたが居て眠っていたんだけど、予鈴鳴ったけど大丈夫？』というのが言いたかった。

伝わったのは多分、後半部分だと思う。

「……ああ、予鈴ね」

「……それじゃあ、私はこれで」

ペコっと頭を下げると、私は出口に向かって歩き始めた。

「あ、ありがとう」

ガタッと彼が立ちあがり、お礼を言うので私は振り返り頭を下げた。

第2話 再びまた会えた（前書き）

『眼鏡ちゃんと王子様』の番外編

あずと鴫斗が、恋人になるまでのお話になります。

第2話 再びまた会えた

彼に会ったのはあの日以来で、それからはいつも通りの図書室だった。

彼に会ったのが、夢だったかのようにさえ思える。

まあ、別に良いんだけど……

「香坂、考えてくれたか？」

「はい……でも、私につとまるのかどうか……」

「おまえがやらんで誰がやるんだよ。成績優秀、品行方正とくればおまえしかないだろ」

「はぁ……」

楯丘学園高校の生徒会は、基本は立候補制だけど立候補者がないと現生徒会メンバーや教職員が指名したりする。そういうものに無縁だと思っていた私は、担任兼生徒会顧問の先生に指名を受けた。

しかし、どう考えても私が生徒会長なんてものが務まるとは思えないんだけど……

とにかくここ最近では、何かと職員室に呼び出されてこの話をさせられる。

生徒会はあるだこーだとセールスし、『こんなに生徒会はいいんだよ』って言うのをアプローチしてくる。

「なあ、頼むよ。香坂」

「……考えておきます」

「夏休み入る前までには答えくれよ」

「はい……」

返事をする、ペコっと頭を下げて職員室を後にした。

先生は、きつとやってくれそうな人に声をかけているように思える。生徒会にいそうな、眼鏡におさげと言ったキャラが欲しいに違いな

い。

そうじゃないと、私が生徒会長なんておかしいし……。

「あず、どこ行ってたの――？」

教室に戻ると、掃除当番だったさっちゃんが帰り仕度をしていて教室に入ってきた私に声をかけて来た。

「先生に呼ばれて……」

「ああ、生徒会の話？」

「うん」

「承諾したの？」

「まさかまさか。生徒会なんて私に向いてると思わないし」

「そうかなあ？意外と、似合ってるかもよ」

と言うとさっちゃんは、ニツと微笑んだ。

「それは、私が眼鏡とおさげという真面目そうな感じだから？」

「イヤイヤ、違うよ。あずって、何も言わないけど芯は結構しっかりしてるじゃん？生徒の声も親身になって受け止めてくれそうだし、向いてると思うよ」

「……そうかな」

入学してから友達になったさっちゃんが、私の事を見てくれてたのは嬉しかった。

照れながら言うのと、さっちゃんは「そうだよ」と言って微笑んでくれた。

「さっちゃん、ごめ――ん！雑誌返すの忘れてた」

同じクラスの野口さんが、さっちゃんのところに来て借りていたらしい雑誌をさっちゃんの机の上に置いた。

その雑誌の表紙に目を向けると、日本人離れしたようなハッキリとした整った顔立ちの持ち主でニツコリと微笑んでいる男の子だった。その男の子が図書室にいた彼に似ていて思わず私はその雑誌を手

取り、まじまじと見入る。

「なにになに？ 香坂さん、成瀬 鴫斗ファンなの？」

「え？ 成瀬 鴫斗——って誰？」

「アイドルグループ“マリンブルー”の成瀬 鴫斗だよ。あず知らない？」

「アイドル……」

「彼、最近うちの芸能科に転入してきたんだよね」

「ええ?!」

「香坂さん、何も知らなさすぎ。皆、噂してたじゃん」

「全然知らなかった……」

「だからここ最近、マスコミとか多いんだよ。アイドルが真面目に朝から学校来るかっての」

手にしている雑誌の表紙をもう一度見る。

やっぱり、この彼はあの図書室で会った彼だ。

アイドルだったんだ……

「なんだったら、その雑誌貸すけど？」

あまりにも見入っている私にさっちゃんは言った。

「いや、いいいい」

そう言って雑誌を置き、二人の元を離れた。

彼がアイドルだったという事が、驚きというかなんとか……てつきり普通科の人だと思っていたから、まさか芸能科の人だったなんて……まるで未知との遭遇のような感覚だった。

それから、帰る前に借りていた本を返却しようと図書室へと寄った。図書室に入ると、受付には図書室担当の先生が一人いて、「あら、香坂さん」と私が入ってくるなり声をかけて来た。

「本の返却を忘れてて……」

私はそう言うと、鞆の中から文庫本2冊を取り出して受付カウンタ

ーの上に置いた。

「新作がさっき入ったわよ」

本を受け取りながら、先生は窓側にある新作コーナーを指差す。
私は指差された場所“新作コーナー”へと進んで、新作をチェック。
その時、誰かが図書室へと来たみたいで、先生と話しているがわざわざ振り返ってみる事もないと思い、気にせず本を手に取り色々と面白そうな本を見ていた。

「――だったらちようどいいわ。香坂さん」

先生に呼ばれ、受付カウンターの方を振り向くとそこにはあの時の彼がいた。

思わず心臓がドキンッと跳ね上がった。

「あ、あの時の眼鏡ちゃん」

彼は私を指差し言う。

私は思わずぺコッと頭を下げる。

「あら、二人とも知り合いだったの？」

先生は、私と彼の顔を交互に見ながら言う。

「まあ、ちよつと」

と彼。

「だったら話が早いじゃない。香坂さん、時間あるんだったら彼に勉強教えてあげてくれないかな？」

「え？」

「香坂さん知ってると思うけど、彼、最近転校してきた芸能科の生徒でね、勉強がまだ追いつかなくて時々私が見てあげてただけど、私も何かと忙しくて時間取れないのよ。香坂さん、成績優秀だし……良かったら追試の間だけでも彼の勉強見てあげてくれないかな？」

ええ?!?!

アイドルの彼の勉強を私が見るの?!?!

「よろしく」

返事もまだなのに、彼は陽気に手を小さく振りながら愛想を振りまいている。

第3話 図書室でお勉強会（前書き）

『眼鏡ちゃんと王子様』の番外編

あずと鴫斗が、恋人になるまでのお話になります。

第3話 図書室で勉強会

私に彼を押しつけるような形で先生は、職員会議があるからあとはよろしく。と言って図書室を後にした。

私たちの他に誰もいない図書室で、ぽつんと二人。

こんなシチュエーションは、ファンの人からしたら舞い上がるぐらいラッキーな出来事なんだろうなあ……と思う。

彼は、「じゃあ、始めようか」と言ってこの間座っていた窓辺にある4人がけの席へと向かい、私は彼と向かえ合わせになるように腰かけた。

彼はすぐに鞆の中から数学の教科書とルーズリーフのバインダーを取り出した。

「早速なんだけど、来週、数学と英語の追試があるんだ……って、その前に名前教えてよ。香坂何さん？」

「香坂 あず……普通科の2年」

「あずちゃんね。OK。俺は——って知ってるか」

「えっと……なる……なるせ……？……なるき……？……あれ？ごめんなさい、私、アイドルとかに弱くて……」

彼は、プツと小さく笑みをもらした。

「いやあ、俺もまだまだだな」

「ごめんなさい……」

「別に謝ることじゃないよ。俺の名前は、成瀬 鴉斗。芸能科の2年。よろしく」

「こちらこそ、よろしくお願いします」

私はペコッと頭を下げた。

「なんか、そう言われるとどっちが勉強教えてくれるのかわかんねえな」

私は思わず笑ってしまい、成瀬くんもつられる様に笑っていた。

その笑顔は、さっき雑誌の表紙を飾っていた彼の笑顔とは比べ物にならないぐらい素敵な笑顔で、胸が急に踊りだしたような感じでドキドキと音を立て始めた。

なんだろう……この不思議な感じ。

これがアイドルのオーラってやつなのかな？

それから、中間テストの範囲だった数学の問題を5つほど二人で解いた。

仕事の関係で前の学校では中々学校に行けなくて勉強がおろそかになったことや、出席日数にも問題があって留年になりそうだったのを転校という形でアイドルのイメージを保ったことなど、問題の合間に話をしてくれた。

彼の話を知っているうちに、あまり知らないけどTVや雑誌などで話している彼より今の彼の方が本来の彼に近いのかな……って思った。

「今日はありがとな。助かったよ」

教科書やペンを片付けながら成瀬くんは言った。

「ううん。私は別に何も特別なことはしてないよ……元々成瀬くんの呑み込みが良いんだよ」

「いやいや、先生より教えるの上手かったし。かなり助かったよ」

「ええー?! 大げさだな」

「いやあ、マジでマジで。本当助かった」

「そんなに喜んでくれたなら、私にも役に立ったってことで嬉しい」
私はそう言うと、ニコツと微笑んだ。

「……………あ、あのさ」

少し間があいた後、言いにくそうな雰囲気で成瀬くんが口を開いた。

「ん?」

「良かったら——ってのが前提なんだけど……」

「うん」

「追試までの間、勉強教えてくれないかな？」

「え？」

「あ、無理に——とかじゃないから。本当に教え方上手いし、あずちゃん教えてくれたら良い点取れそうな予感するんだよね。本当にダメかな？」

「……私、部活やってるわけじゃないし、暇な時は今日みたいに図書室寄って帰るだけだから時間もあるし……私でよければ……いいよ」

「マジで?! サンキュー!」

机の上に置いていた私の両手をがしっと握ると、何度もありがとう！ありがとう！とお礼を言っていた。

手を握られただけなのに、私の胸は何度目かのきゅんって音を立てていた。

それから、お礼に。と言って、ルーズリーフの紙にサインを書いて私にくれた。

「俺、滅多にサインしないから、結構価値あるよ」

「あ、ありがとう……」

それから、解らないことがあったら聞きたいから。という理由で携帯番号とメールアドレスを交換して、私たちは別々に図書室を後にした。

学校を出て駅のホームについた時、成瀬くんからメールがきていた。

『今日はありがとう。』

騒ぎになると面倒だから、今日の事は内緒でよろしく。
送ってあげられずごめん

鴛斗』

家につくまでの間、無意識に3回もメールを見てしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5925t/>

図書室の初恋 ～眼鏡ちゃんと王子様 First Love ver.～

2011年6月7日00時44分発行